

変体仮名字母から見た一写本『篁物語』影考館甲本

——【附載】京都大学人文研究科図書館所蔵本「小野篁集」(影印)——

安部清哉

論文要旨

本稿では、中古の和文資料である『篁物語』の写本のうち、より古態をとどめていて、14世紀半ば以前の形態を保持する可能性がある「末尾有空白系統本」(安部(2020))の一写本である影考館本の甲本を取り上げ、その最末尾1文の特徴、および、使用仮名字母の使用開始時期について検討する。

結論としては、「末尾有空白系統本」では最末尾1文は、本文部分で成立した後の別段階(*後日、後人、後代、また、同一人物が別人も含む)に追記されたこと、甲本ないしその遡及する系統の写本は、字母「新(し)」「遅(ち)」「半(は)」「累(る)」が使用可能になった、およそ1,000年前後頃以降のものであり、甲本の上限は10世紀以前には溯らないこと、を述べた。具体的に検討した問題点は以下の通りである。

①本文部分とは異なる特徴を持ち、本文部分成立ののちの後補部分と安部(2020)にて推定した最末尾の1文(「又あらかし【新】／かやうにおもひて文つくるひとは」)を取り上げ、ア、字母「新」の使用、イ、1文内での改行箇所での1文字分の余白の問題

②写本中の字母「遅」「半」「累」などの使用頻度の少ない変体仮名

字母について、仮名史上における使用時期の問題

併せて前稿・安部(2020)にて、それまで未公開であった京都大学人文研究科図書館所蔵本「篁物語」を影印で発表したのに引き続き、京都大学人文研究科の許可のもと、「小野篁集」の影印(複写)を資料として提示する。当該写本自体は、書陵部本の写本(孫本)の位置にあるものではないが、『篁物語』の諸写本研究が、甲本の仮名字母レベルやその空白・改行箇所の余白に至るレベルまで重要な意味を持つ段階になったことに鑑み、また、宮内庁書陵部本に忠実な写本と推定される京都大学本「小野篁集」全文をここに掲載する。

キーワード 『篁物語』、仮名字母、「新(し)」「半(は)」「遅(ち)」「累(る)」、京都大学人文研究科図書館所蔵本「小野篁集」(影印)

【目次】

- 1 はじめに
- 2 本稿の目的——最末尾文の余白及び唯一の字母の時代
- 3 “末尾有空白系統本”の最末尾文の特異性と字母「新」
 - 3—1 “末尾有空白系統本”の最末尾文での余白と字母
 - 3—2 改行部下部の1文字分余白
 - 3—3 唯一の字母「新」の最末尾文での使用
 - 3—4 字母「新」は変字法ゆえの使用ではない
 - 3—5 最末尾文の特異性と忠実性
- 4 仮名史上における「篁物語」の変体仮名字母「新」「遅」「半」「累」
 - 4—1 甲本・乙本共通の使用頻度1回の字母と仮名史
 - 4—2 変体仮名「新（し）」の使用時期
 - 4—3 変体仮名「遅（ち）」の使用時期
 - 4—4 変体仮名「半（は）」の使用時期
 - 4—5 変体仮名「累（る）」の使用時期
 - 4—6 字母「新」「遅」「半」「累」の使用時期の上限
- 5 甲本の書写態度
- 6 京都大学文学研究科図書館所蔵本「小野篁集」（資料篇 II）
- 7 おわりに——「篁物語」の字母研究の課題

1 はじめに

古典の資料では、写本の仮名表記やその字母も、その資料の特徴を解明するための貴重な研究対象であることは言うまでもない。本稿では、『篁物語』の彰考館本「甲本」の仮名字母を取り上げ、末尾部分での「し」の字母「新」の特異性と、写本中、孤例となる変体仮名字母「遅（ち）」「半（は）」「累（る）」の使用開始時期を調査し、書写年代について考察する。

『篁物語』は、平安時代中期の短編であるが、文学史上の位置においても、また、日本語史上のその日本語の使用についても、さらに『源氏物語』への影響という点においても、改めてその評価を見直すべき文芸作品であることが次第に明らかになってきている（注1）。

本稿では、そのような『篁物語』における“末尾有空白系統本”（安部（2020）での分類名、彰考館甲本・彰考館乙本・京都大学文学研究科図書館本が該当）の写本それぞれに共通して、1回使用されている変体仮名の字母4種類——字母「新」による仮名「し」、および、字母「半」による仮名「は」、同じく、字母「遅（ち）」「累（る）」——の使用時期について考察することで、甲本という写本の性格およびその書写時期について検討してみようと思う。これまでの『篁物語』研究において、字母の比較は、平林文雄（2001）

で諸本の本文の字母一覧等は提示されているものの、内容上は、本文解釈上の言及程度に留まる。諸写本の年代比較のために特に取り上げられることがなかった。

それに併せて、『篁物語』の研究が、写本の文字間の空白、改行部分下の余白、字母レベルにも及んできたことに鑑み、これまで未公開であった京都大学文学研究科図書館所蔵本「小野篁集」についても、同研究科のご許可のもと、その全文を影印（複写）にて提示しておくこととしたい。

2 本稿の目的——最末尾文の余白及び唯一の字母の時代

『篁物語』の諸写本の中に、最後の1文の直前に2文字分相当の空白がある写本がある。安部（2020）（以下、前稿とも記す）では、それらを、“末尾有空白系統本”と仮称した。該当する写本は、彰考館甲本・彰考館乙本・京都大学文学研究科図書館所蔵本（以下、京都大学本と記す）である。

当該部分の写真を、【図1】として、京都大学本で示しておく。（甲本は、著作権の関係があるので、その極めて忠実な孫本に当たり、前稿・安部（2020）で掲載した京都大学本にて示す。以下でも前稿による京都大学本のコピーで甲本の状態を代用的に示す。）

図1 京都大学本「篁物語」
末尾部分（安部（2020））

【翻字】（下記の傍線箇所が最末尾の1文。翻字では末尾の改行位置に合わせて表示してみた。□は余白。）

（1行目） とる大じもあらむやた、

【採る大臣もあらむや。ただ】

（2行目） ころるかたちさいおとり給なる

【心形・才を取り給うなる】

（3行目） へし□□又あらしかし□

【べし。□□また、あらじかし「新」、□】

（4行目） かやうにおもひて文つくる人は

【か様に思いて、文作る人は。】

注 3写本とも、最末尾の1文の直前の2文字分の空白以降は各字母も改行位置もまったく同じ。甲本と京都大学本とは書体まほぼ同一。乙本は、最末尾文の前の部分での改行位置が他の2本とは異なるものの、3行目の2つ目の「し」の字母「新」での改行と、その直下に1文字分の余白がある点は、甲本・京都大学本と同じである。

それらの写本では書名は「篁物語」とある。一方、その空白がない写本（『末尾無空白系統本』）における書名はいずれも「小野篁集」という書名で伝わっている、という相違がある。本稿では、その『末尾有空白系統本』の「篁物語」、特にその中でも写本として優位と推定される（後述）彰考館甲本を中心に取り上げる。

さて、挙げた変体仮名のうち、「し（新）」は、最末尾の1文に現れている。その最末尾の1文（以下、最末尾文と略す）は、安部（2020）での考察において、最末尾文より前の本文部分が成立した後の別段階*——（*後日、後人、後代、また、同一人物か別人かも含む）——に追記されたと推定された。その最後の1文内（に）だけただ一度だけ現れている仮名である。「新」は、草仮名としてではなく平仮名として使用されるようになる時期は、比較的遅いことが仮名史の研究からはわかつている。

音節「し」は、『篁物語』では仮名表記で240回以上も現れているが、字母「新」は最末尾文のみに現れる。それは、この最末尾文の特異性（拙論での『後日補記』説）を裏付ける特徴とみなすことができる。同じ『篁物語』でも、書陵部本（書名は「小野篁集」）では、この字母「新」は一度も使用されていないのである。

また、字母「半（は）」「遅（ち）」「累（る）」も、『末尾有空白系統本』では、一度だけ使われている（「累」のみ乙本で2回、後述）。これらの字母の仮名としての使用も、比較的遅いことが仮名史の諸研究からうかがえる。この3字母は、甲本では使用頻度は共に1回

であり、その使用箇所は乙本と一致している。つまり、甲本・乙本の優劣や書写関係は現時点では結論が出ていないものの、甲本・乙本で共通して保持されてきた仮名字母で、これらの底本にも遡及し得る可能性がある字母と見ることもできる変体仮名である。（さらに「羅（ら）」が甲本・乙本共通箇所でも2回ずつ使われている。【注5】も参照。）

これら「し（新）」「は（半）」「ち（遅）」「る（累）」「ら（羅）」は、これらの仮名字母が使用されはじめる時期と照合することとで、『末尾有空白系統本』の「篁物語」（彰考館甲本・同乙本・京都大学本）の書写年代の上限の推定を可能にする材料となる、と考えられた。

ところで、これら『末尾有空白系統』の「篁物語」（上記3写本）は、中世中期以前の段階の『篁物語』の、より古い形態を留めている蓋然性が高い、ということとを安部（2020）にて考察した。そのような、より古い形態を留めている写本群（3写本）にあつて、共通箇所（に）認められるこれらの仮名字母の使用とその使用回数の少なさは（1回のみ。ただし、「羅」は2回使用）、極めて忠実に踏襲されてきた（他の部分での校異がありながらも）重要な共通性であると考えてみるべきであろう。それらの仮名字母の出現時期には、一定の時代的制限（上限）があるゆえ、本稿では、その観点から考察を加えてみたものである。

取り上げるのは、『篁物語』の上記写本のなかでも、その資料と

しての優位性がこれまでも指摘されてきている甲本である。甲本は、京都大学本の底本の親本に当たり（京都大学本の奥書に記載あり。安部（2020）参照）、乙本は甲本を書写したものと見方もされている（『篁物語新講』）からである。

なお、念のため解説を少し加えておけば、『篁物語』には、2種類の写本系統があると認められる（安部（2020））。最末尾文（1文）の直前に二文字分の空白のある「末尾有空白系統本」（彰考館甲本と同乙本、京都大学本Ⅱ写本の書名はそれぞれ「篁物語」と、その空白のない「末尾無空白系統本」（承空本、宮内庁書陵部本Ⅱ写本の書名はそれぞれ「小野篁集」）である。これらにおける最末尾文直前での空白の有無の相違の考察からは、「末尾有空白系統本」の方が、より古い本文形態を留めていると解釈されたものである。

なお、「末尾無空白系統本」である書陵部本には、「新」「半」「遅」「羅」の4字母は使われていない。「新」「半」「遅」「羅」は、平安期資料ではあまり使われない、使用頻度の小さい仮名である。末尾無空白系統本では、これら「新」「半」「遅」「羅」の使用は一度もなく、当該箇所それぞれでも、使用頻度の多い通常の仮名（「し（之）」「は（八）」「ち（知）」「ら（良）」）に変えられてしまっている。この点にも、「末尾有空白系統本」と「末尾無空白系統本」の、より古い形態を留めているかどうかという差異が投影している可能性もある。

なお、本稿では、作品名としての総称としては二重カッコ『篁物

語』で表記し、京都大学本や彰考館本などの写本の書名としては一重カッコでの「篁物語」と表記して区別する。後者に合わせ、承空本・書陵部本の書名である「小野篁集」も一重カッコにて表記する。

3 “末尾有空白系統本”の最末尾文の特異性と字母「新」

3-1 “末尾有空白系統本”の最末尾文での余白と字母

“末尾有空白系統本”の写本の最末尾文を改めて検討すると、前稿・安部（2020）で指摘した点（最末尾文直前の2文字空白）のほかに、次のような特徴がさらに見出せる。これらは、同系統の3写本（彰考館甲本・同乙本・京都大学本）に共通した特徴である。

○末尾有空白系統本3本（彰考館甲本・同乙本・京都大学本）の最末尾の1文の特徴

ア 最末尾文の直前に2文字分の空白がある。（前稿・安部（2020）での指摘）

イ 最末尾の1文の改行位置が他と異なり、行末に1文字分の予白を残して改行されている。【注2】

ウ 最末尾の1文の2つ目の「し」の変体仮名の字母「新」は、写本中唯一の「新」の使用である。（甲本では、「し」の仮名合計244例中、「之」239例、「志」4例、「新」1例、

【表1】参照）

エ 最末尾文の「あら之か新」(あらじかし) は、「し□し」での変字法の可能性も疑えるが、他の「し」の連続ないし複数使用事例(同一行内複数箇所*)ではすべて「之」「志」で対応している(変字法ではない)。(※例えば「しし」あるいは「し□し」や「ししし」いずれかの連続箇所) は、すべて「之」「之□之」「志□之」として「之」「志」が使用可能である。即ち、「新」以外での変字が本文部分の基本方法ゆえ、変字法として敢えて「新」が選択されたとはみなしがたい。なお「志」の字母は、4 例共すべて自立語語頭字母として統一的に使用されていて規則的使用である。

アの点は安部(2020)にて取り上げているので、以下ではイ・ウ・エについて検討を加えてみたい。

3-2 改行部下部の1文字分余白

まず、イの「最末尾の1文の改行位置が他と異なり、行末に1文字分の余白を残して改行されている」点を説明する。

甲本の各丁の各行の最下部での仮名文字は、その書体の下端の位置を揃えて書かれている。即ち、改行位置は意識的に文字の下端をそろえて記載されている。甲本での状況は、平林(2007、改訂増補版)の影印で確認できるが、その掲載上、著作権の関係もあるので、本稿ではその甲本の忠実な写本である京都大学本「篁物語」の数丁

を、参考を示しておくことにする【本稿末尾の資料1-4参照】。京都大学本は、改行位置、文字配置、文字の大きさに至るまで、甲本に極めて忠実な書写本である(安部(2020)) 京都大学本「篁物語」を数丁参考まで示す。

さて、甲本では、和歌の直前にある行の場合のみその下部に余白が生じているだけで、それ以外では、せいぜいわずかな凸凹が認められる程度である。行毎の下端は、単なる改行位置に留まらず、行の末尾での数文字の字配り、文字の配置、文字の大きさ、時に直前の文字との微妙な横並び(多少横にずらして並べたようにも書写する)に至るまで、意識的に各行下端がそろうように筆記されている状態が確認できる。1文字分の余白すらないような字配りになっている。

そのような点からみて、最末尾文の改行位置の下部にある1文字分の余白分は、それ以前の本文筆写姿勢(筆記方針)とは、明らかに異なっていると見なせよう。

3-3 唯一の字母「新」の最末尾文での使用

次に「ウ 最末尾の1文の2つ目の「し」の変体仮名の字母「新」は、写本中唯一の「新」の使用である」について解説する。【図1】に示したように、最末尾文には次のように字母「新」が1文字現れている。

●□□又あらしか新□／かやうにおもひて文つくる人は

この「新」による「し」は末尾有空白本では、ここ1回だけの使用である。甲本における仮名「し」は、合計244例あるが（平林（2001）による）、そのうち「之」239例、「志」4例、「新」1例で、ほとんどが字母「之」である（表1参照）。字母「志」4例の使用箇所は、後で具体例を挙げるが、4例すべて「自立語の語頭」にて統一的に使用され、規則的である。ここでの字母「新」表記は唯一で、特異であることがわかる。

3-4 字母「新」は変字法ゆえの使用ではない

最後にエの「し□し」での変字法の可能性も疑えるが、変字法ではない」点について解説する。

当該箇所は「し□し」の連続になるので変字法として敢えて「新」が選ばれた可能性も疑える。そこで、仮名の「し」について、同一行内複数使用箇所をすべて確認してみた（後掲の【表2】参照）。調査対象は、1行内で、例えば「しし」あるいは「し□し」や「ししし」となる連続箇所である。該当箇所はすべて、「之之」「之□之」「志□之」として「之」「志」が使用されている。

「志」の字母は、4例共すべて自立語語頭字母として統一的に使用されていて規則的使用である。それゆえ、「志」は変字のために使用されているというよりもむしろ「語頭」表記の働きの方を優先して使用しているとみられる。これらからは、「し」が複数連続・断続しても「之」「志」が使用可能であり、むしろ「之」のみです

ませているとさえ言えよう。変字法で「新」が選択されたとはみなしがたい。

3-5 最末尾文の特異性と忠実性

上記3-3-5のように、安部（2020）で指摘したアの点以外にも、これらの特徴をもつことは、この最末尾の1文が、そこより前の本文部分とは明らかに異質の記述方法によっていることは明らかであろう。この最末尾文は、本文書写とは異なる別の過程における補筆部分であることが、前稿よりも、より明確になった。

さらに、ウ・エに示したように、この最末尾の1文には、変体仮名の字母の使用に特徴が見られた。この「新」は、仮名史に照らし合わせると、平安時代でもやや後代に使われ始める字母である。「新」の使用時期を、改めて検討する必要がある。併せて、そのようなやや新しい、使用が稀な「新」の字母をもつこの伝本は、他の本文箇所における字母についても、改めて検討してみる余地がある。その点については4章でさらに検討してみたい。

ところで前の2-1節のように、空白・改行位置（余白）・字母「新」の唯一使用という、最末尾文の特異性が、3つの写本で保持されてきていることと、それらの特徴が、14世紀後半書写である承空本系の写本とは異なる、より古い形態を保持していることを考え合わせると、これら「末尾有空白系統本」は、単に、14世紀中期以前に溯る『篁物語』の古い形態である（安部（2020））というだけ

でなく、特に甲本・乙本の底本における形態をより忠実に書写継承しようとした意識が強い書写者による写本なのではないか、と考えることもできる（京都大学本は、甲本を底本にした写本を臨摸した写本であることもわかつている）。即ち、それは、最末尾文だけでなく、写本全体において、原本により近い段階の本（写本）の形態を比較的よく留めている写本である可能性を示唆しているとみることもできよう。（さらに、その本文異同や字母の相違からは、甲本の方が乙本よりも、よりその可能性が高いと推定される。）

その点を考慮すると、最末尾文だけでなく、その前の本文部分における字母についても検討しておくことは、「有空白系統本」（特に甲本）の特徴を説明するためには、有効な一視点になると思われる。そこで本稿では、字母「新」および仮名「し」の使用状況、字母「半」「遅」「累」について検討してみたいと思う。

4 仮名史上における「篁物語」の変体仮名字母「新」「半」「遅」「累」

4-1 甲本・乙本共通の使用頻度1の字母と仮名史

『篁物語』の有空白系統本では、使用頻度が比較的小ない仮名字母がいくつか使用されている（【表1】参照）。ここでは、それらの中から、甲本・乙本両方にて共通する箇所度1度使用されている字母「新」「半」「遅」「累」を取り上げる（【表1】の太枠部参照、「遅」のみ乙本にては2度使用される）。特に、その仮名史上にお

ける使用時期について、検討してみた。甲本と乙本とは、字母の使用に相応の相違があるが（後掲の【表1】参照）、最末尾文中ではすべて全く一致し、かつ、使用頻度1回のこれら4文字では一致しているの、これら4文字については、甲本・乙本の底本での表記を踏襲しているなど、その重要性が高い字母とみることとできる（なお、甲本のみに絞ると、使用頻度が1、2回と少ない字母は他にもある。それらについては別稿を期することにしたい。）

変体仮名字母の使用時期を検討するにあたり、仮名史の使用に関する研究は多いが、ここでは、以下の仮名史研究を参照することとした。そこでは、字母ごとに使用された資料が影印での書体も含めて掲載されていたり、音節ごとの仮名使用年表が掲載されているものである。

なお、下記の内、池田亀鑑（1941）、加瀬藤圃（1970）、長谷川千秋（2018）から利用した図表の詳細については【注3】に一覧にしている。

〔仮名字母参考文献〕

- 池田亀鑑（1941）『古典の批判的処置に関する研究』図表第一 古代平仮名字体一覽表「図表第二 土佐日記諸本平仮名字体統計表」（1990 第二刷使用）【注3 参照】
- 矢田勉（2012）『国語文字・表記史の研究』汲古書院（第二章 第三編本文と「平仮名頻用字体変遷表」ほか）
- 矢田勉（2018）『平仮名字体表』『日本語学大辞典』東京堂

○長谷川千秋 (2018) 「使用字母からみた『秋萩帖』のかな」『秋萩帖の総合的研究』勉誠社 (別表1「秋萩帖」と九、十世紀の仮名資料の字母」、「別表2「秋萩帖」と草仮名資料の字母)。

〔仮名字典類〕

◇加瀬藤圃 (1970) 『古筆かな字典』三省堂——本稿略称『古筆』

(仮名一覧表のうち特に付表3、4、5、6を利用【詳細は注3参照】)

◇筒井茂徳 (1981) 『日本書道大字典 かな名跡大字典』角川書店——本稿略称『名跡』

◇井茂圭洞 (1991) 『一玄社 かな字典』一玄社——本稿略称『かな』

◇木村東陽 (2006) 『日本名筆字典』天来書院——本稿略称『名筆』

なお、『篁物語』の甲本・乙本および書陵部本「小野篁集」での字母の使用頻度については、平林文雄・財団法人水府明徳会編著 (2001) に「八、三本使用の仮名字母別数量一覧表」(319頁) が掲載されておりそれを参照した (表1)。

4-2 変体仮名「新」の使用時期

末尾有空白系統本の最末尾文内に「新」が1回使用されている。

3-3で示した第Ⅱ部第八章二十三段「回顧」Ⅱ学生評と新旧の時世対比Ⅱ第Ⅱ部の終段」の最末尾文である。

●二十三段「回顧」——「□□又あらしかし【新】□□／□□かやうにおもひて文つくる人は」

「新」については、4-1に挙げた仮名字母参考文献では以下のようである。なお、仮名字母で参考にした字典類の名称は、上記の文献一覧に記載した略称にて記載する。またそれぞれの資料で掲載されている仮名資料名が多い場合には、年代が比較的新しくなるものについては「く以下が挙げられている」として略した場合がある。

○池田亀鑑 (1941) Ⅱ図表第一で「秋萩帖」「賀歌切」にある。図表第二の諸本にはなし。

○矢田勉 (2012) Ⅱ「新」の記載なし。

○矢田勉 (2018) Ⅱ「新」の記載なし。

○長谷川千秋 (2018) Ⅱ別表1に「秋萩帖」8例とあるが、他の資料ではなし。別表2では「綾地切」2例、「卷子本古今集」に3例ある。

○『古筆』Ⅱ仮名一覧では「賀歌切 (佐理)」、「曼殊院本古今集 (行成)」、「大色紙 (公任)」、「香紙切 (小大君)」、「古今集序」、「卷子本古今集切」以下が挙げられている。付表3「高野切 (二種) 字母頻度表」にはなく、付表4「定家書写本土佐日記字母頻度表」で1例、付表5「十世紀における女手の書体表」にはなく、付表6

表 1 『簗物語』「三本使用の仮名字母別数量一覧表」(平林文雄・財団法人水府明徳会編著 (2001) より)

に	な	と	て	つ	ち	た	そ	せ	す	し	さ	こ	け	く	き	か	お	え	う	い	あ	
尔	奈	止	天	津	知	堂	所	世	春	之	左	己	計	久	幾	可	於	衣	宇	以	阿	字母
105	154	245	220	44	28	90	46	52	36	194	86	116	101	74	94	163	89	20	90	171	68	集
175	162	287	257	0	50	23	0	40	12	239	60	205	14	97	124	194	92	13	85	184	5	甲
183	151	287	249	1	49	21	0	42	23	239	72	194	28	93	124	206	92	14	85	184	17	乙
仁	那	登	帝	川	地	多	曾	勢	須	志	佐	古	気	具	支	加	盈				安	字母
90	16	23	37	29	14	70	16	0	25	51	3	27	24	19	20	98					39	集
13	8	9	3	73	0	106	59	15	2	4	29	1	74	2	0	72					104	甲
16	18	8	10	57	0	123	60	13	7	4	16	9	51	6	0	60					93	乙
丹				都	遅	太	楚		寸	新			期	个		起						字母
12				1	0	13	0		23	0			4	20		11						集
0				0	1	34	1		70	1			0	76		2						甲
1				0	1	19	0		54	1			0	73		3						乙
耳				徒																		字母
3				0																		集
22				4																		甲
9				21																		乙
																						字母
																						集
																						甲
																						乙

八、三本使用の仮名字母別数量一覧表

ん	を	ゑ	ゐ	わ	ろ	れ	る	り	ら	よ	ゆ	や	も	め	む	み	ま	ほ	へ	ふ	ひ	は	の	ね	ぬ																								
无	遠	恵	井	王	呂	礼	留	利	良	与	由	也	毛	女	武	三	満	保	部	不	比	八	乃	祢	奴																								
45	92	8	10	26	16	79	105	130	106	52	10	57	144	42	35	79	92	20	59	44	65	203	169	14	34																								
46	65	14	8	10	24	110	106	173	102	50	11	60	162	35	33	28	42	23	64	59	100	190	201	17	36																								
53	49	15	8	19	29	81	99	176	103	49	11	60	166	37	25	35	42	21	61	60	92	176	165	17	31																								
越		為		和		路		連		累		里		羅				遊		屋		母		免		舞		美		末		本		辺		婦		飛		者		能		年		怒			
5		6		3		7		38		7		85		0				1		1		2		2		0		18		21		9		6		39		40		32		31		5		2			
34		11		18		25		13		1		51		3				0		0		0		9		0		45		66		7		0		1		1		25		15		0		0			
50		11		9		18		42		2		46		2				0		0		0		6		1		31		58		9		0		5		7		32		52		0		5			
							類									裳					見		万					布		日		波		農															
							0									0					0		6					0		0		12		1															
							2									3					16		8					17		4		36		0															
							1									0					13		15					12		5		20		0															
流													盤																																				
																						0																										6	
																						0																										8	
																						7																										28	

「三蹟の草の手と中国古代の草書の対照表」には道風8例（秋萩帖）、佐理2例（賀歌切・下絵萬葉集切）、行成（雲紙本和漢朗詠集）1例とある。

○『名跡』Ⅱ仮名一覧には「秋萩帖」「綾地歌切」「雲紙朗詠」「関戸朗詠」「元暦萬葉卷六・卷二十」「曼殊古今」「和泉式部続集下巻切」「香紙切」以下があげられている。

○『かな』Ⅱ「万葉がな／草かな／消息」として「秋萩帖」「綾地切」が挙げられ、関戸系として「曼殊院本古今集」「和泉式部続集切」「香紙切」、藤原定実として「元永本古今集」「卷子本古今集」「筋切・通切古今集」、藤原伊房／定信として「堺切」が挙げられている。

○『名筆』Ⅱ「雲紙朗詠」「曼殊院古今」「元永本古今」が挙げられている。

「新」については、これらの諸例から草仮名の事例を除外すると、古いものでは、「雲紙本朗詠集」「曼殊院本古今集（行成）」など伝ではあるが藤原行成の使用が確認できるので、行成（972～1028年）の頃前後以降での使用と見るならば、およそ1000年前後以降での変体仮名と推定されようか。

4-3 変体仮名「遅（ち）」の使用時期

「ち」の字母「遅」の仮名が、末尾有空白系本では一度だけ、第

I部第二章八段にて使用されている。

●八段「兵衛佐の消息と篋の妨害」―「また、これをれいの童、もて来たり。兄（せうと）、みち【遅】にさしあひて、」第一部

第二章八段

仮名字母参考文献では同じく以下のである。

○池田亀鑑（1941）Ⅱ図表第一では「本阿弥切」のみにある。図表第二にはない。

○矢田勉（2012）Ⅱ表20に「三宝感応要録紙背消息」（1090年代以降Ⅱ久曾神説）の例がある。

○矢田勉（2018）Ⅱ「遅」の記載なし。

○長谷川千秋（2018）Ⅱ別表1にはなし。別表2では「卷子本古今集」に1例ある。

○『古筆』Ⅱ仮名一覧では「本阿弥切（道風）」「筋切（佐理）」「仮名消息（行成）」「大色紙（公任）」「御蔵切」「香紙切（小大君）」「隆能源氏絵詞（伊房）」が挙げられている。付表3・4・5・6にはない。

○『名跡』Ⅱ「伝小野道風屏風歌土代」「伝行成仮名消息」「伝行成歌仙歌合」「元暦萬葉卷六」「益田朗詠集切」「関戸古今」「道済集切」「本阿弥切」「和泉式部続集下巻切」「針切」「御蔵切」「香紙切」以下が挙げられている。

○『かな』Ⅱ「一種系」として「歌仙歌合」があげられ、関戸系とし

て「関戸本古今集」「針切」「和泉式部統集切」「香紙切」、藤原伊房／定信として「石山切伊勢集」、が挙げられている。

○『名筆』＝「関戸古今」「本阿弥切」が挙げられている。

「遅」については、「新」と同様にこれらの諸例から草仮名の事例を除外すると、古いものでは、「伝行成仮名消息」「伝行成歌仙歌合」「関戸本古今集」など、伝ではあるが藤原行成の使用が確認できるので、行成（972～1028年）の頃前後以降での使用と見るならば、およそ1000年前後以降での変体仮名と推定されようか。

4-4 変体仮名「半（は）」の使用時期

「は」の字母「半」の仮名が、末尾有空白系本では一度だけ、第一部第七章二十一segmentで使用されている。

●二十一segment「新妻との問答」——「わいてもこそは、むかし人は【半】、心もかたちも、」第二部第七章二十一segment

仮名字母参考文献では以下のようなものである。

○池田亀鑑 (1941)＝図表第一では「賀歌切」のみにある。図表第二の諸本では「図書寮本」1例をあげる。

○矢田勉 (2012)＝「半」の記載なし。

○矢田勉 (2018)＝「深窓秘抄」(11世紀中頃か)の例あり。

○長谷川千秋 (2018)＝別表1には例なし。別表2では「綾地切」2例、蓬萊切1例、がある。

○『古筆』＝仮名一覽では「通切」「賀歌切（佐理）」「蓬萊切」「雲紙本和漢朗詠集（行成）」「大色紙」「唐紙本和漢朗詠集（公任）」「元永本古今集（俊頼）」「三十六人集元真集」「葦手下絵朗詠集（伊行）」が挙げられている。付表3「高野切（一種）字母頻度表」には1例、付表4「定家書写本土佐日記字母頻度表」および付表5「十世紀における女手の書体表」にはなく、付表6「三蹟の草の手と中国古代の草書の対照表」には道風なし、佐理2例（賀歌切・下絵萬葉集切）、行成（雲紙本和漢朗詠集）2例とある。

○『名跡』＝「綾地歌切」「高野切一種」「雲紙朗詠」「関戸朗詠」「蓬萊切」「元暦萬葉集卷七甲」「伝公任大色紙」「久松切」「元真集（三十六）」「元永本古今集」以下が挙げられている。

○『かな』＝「万葉がな／草かな／消息」として「綾地切」が挙げられ、一種系として「深窓秘抄」、三種系として「蓬萊切」、藤原定実として「元永本古今集」「元永本古今集」、光悦として「和歌巻」「古今集仮名序」が、挙げられている。

○『名筆』＝「高野切一種」「雲紙朗詠」「蓬萊切」「元暦萬葉」「元永本古今」が挙げられている。

「半」についても同様に、これらの諸例から草仮名の事例を除外すると、古いものでは、「蓬萊切」「雲紙本朗詠集」「関戸本朗詠集」

など、伝ではあるが藤原行成の使用が確認できるので、行成（972～1028年）の頃前後以降での使用と見るならば、およそ1000年前後以降での変体仮名と推定されようか。

4-5 変体仮名「累(る)」の使用時期

「る」の字母「累」の仮名が、末尾有空白系本の甲本・京都大学本では1回だけ使用されている（乙本では2回使用されている）。次の第II部第二章七段である。

●七段「兵衛佐の懸想文と和歌の贈答」——「神の教へ給しかばなむ、さして奉る【累】。かの石神の御もとにて、」第II部第二章七段

仮名字母参考文献では以下のようなのである。

○池田亀鑑(1941)＝図表第一では「継色紙」「御物と漢朗詠集」をあげる。図表第二の諸本では「定家自筆本」19例、「近衛家本」2例、「三条西家本」17例、「大島本」53例、「為相本」1例をあげる。

○矢田勉(2012)＝「累」は、「鎌倉時代仮名文書類用仮名字体表」にあり、「鎌倉時代の資料に時折見える。日蓮も用いており、準頻用字体といったところである。」とする。表31『日蓮仮名遺文』仮名字体表「の「ル」に「る【留】の下段に「累」があり、」※下段は用例の稀なものである。」とある。

○矢田勉(2018)＝1269年の「日蓮『法門可被申様之事』、1682年の『好色一代男』巻一をあげる。

○長谷川千秋(2018)＝別表1、別表2ともになし。

○『古筆』＝仮名一覧では、「継色紙(道風)」「筋切(佐理)」「関戸本古今集」「粘葉本和漢朗詠集」「関戸本和漢朗詠集(行成)」「高光集切(俊頼)」「三十六集貫之集下」「三十六人集敦忠集」「三十六人集元真集」「三十六人集是則集」「元暦校本万葉集」が挙げられている。付表3「高野切(一種)字母頻度表」には無く、付表4「定家書写本土佐日記字母頻度表」では18例とあり(上記・池田(1941)では19例)、付表5「十世紀における女手の書体表」には無く、付表6「三蹟の草の手と中国古代の草書の対照表」には、行成(関戸本和漢朗詠集1例、雲紙本和漢朗詠集3例、粘葉本和漢朗詠集・高野切三種蓬萊切1例)の例がある。

○『名跡』＝「伝小野道風屏風歌土代」「継色紙」「深窓秘抄」「伝行成歌仙歌合」「雲紙朗詠」「関戸朗詠」「高野切三種」「粘葉朗詠」「近衛朗詠」「元暦万葉卷一」「元暦万葉卷六」「元暦万葉卷十四」「元暦萬葉卷二十」「関戸古今」「伝俊頼高光集切」「冷泉本素性集」「友則集(三十六)」「斎宮集(三十六)」「猿丸集(三十六)」「敦忠集(三十六)」「是則集(三十六)」「元真集(三十六)」「元永本古今集」「筋切」「巻子古今」「源氏絵詞薄雲」「類聚古集卷一」「類聚古集卷六」「定家熊野懷紙」「土佐日記」「墨流切朗詠集」「姫路切」「伝為家やマト運輸物語」が挙げられている。

○『かな』Ⅱ万葉がな／草かな／消息として「継色紙」が挙げられ、一種系として「深窓秘抄」「歌仙歌合」、三種系として「高野切第三種」「粘葉本朗詠集」「伊予切朗詠集」「元暦万葉集第一」「近衛本朗詠集」、関戸系として「関戸本古今集」、藤原定実として「元永本古今集」「卷子本古今集」「筋切・通切古今集」、藤原伊房／定信として「烏丸切」、藤原俊成として「御家切古今集」、などが挙げられている。

○『名筆』Ⅱ「継色紙」「高野切三種」「粘葉朗詠」「関戸古今」「元永本古今」が挙げられている。

「累」は、これらの諸例から草仮名の事例を除外すると、古いものでは、「継色紙」、伝ではあるが藤原行成の使用が指摘される。

「継色紙」は年代未詳ながら10世紀半ばから11世紀前半と推定されている。「筋切」は佐理説は現在とられずそれより後の時代とされるが未詳である。伝・行成(972〜1028年)の例とも合わせれば、およそ1000年前後以降とも言えるが、「継色紙」「筋切」にある点は、他の3字母よりも多少早い可能性をうかがわせているか。

4—6 字母「新」「遅」「半」「累」の使用時期の上限

4—2—5節で検討した結果、「新」「遅」「半」の使用の時期は、いずれも伝・藤原行成の資料が現時点での上限であり、「累」はそ

れらより多少遡る可能性も見えるが、およそ1000年前後以降での使用と推定される。これら4種の字母の使用開始時期の上限がある程度近似しているという点は、偶然の一致の可能性もあるが、この写本の性格の一面を投影しているとも考えられようか。

特に最末尾文での「新」の使用が、原本の字母を踏襲している場合には、その1文の追記は、およそ1000年頃以降の段階とも推定できるかもしれない。

○5字母使用頻度 甲本 乙本 書陵部本 出現箇所

	新	遅	半	累	羅
甲本	1	1	1	1	3
乙本	1	1	1	2	2
書陵部本	0	0	0	7	0
出現箇所	甲本・乙本での出現箇所同じ	同右	同右	甲本の1例は乙本と出現箇所同じ 甲本の2例は乙本と出現箇所同じ	

ところで、安部(2017)では、『篁物語』の原作者を源順と推定した。源順の没年は983年である。仮に、源順説に従った場合は、甲本(乙本も)の書写は、字母「新」「半」「遅」「累」が使用可能になって以降ということになるので、甲本は『篁物語』の原本そのものには遡る可能性は低く、また、原本の字体(字母)をすべてにわたって忠実に筆者したものとも言えない、ということになる。この字母研究は、そのような考察まで射程に入ってくるものとなる。

甲本の字母には、これら4字母以外にも、『篁物語』中で使用頻度が少なく、仮名史上でも出現頻度も多くはない字母がまだ見られる。甲本(乙本)の書写時期の上限を検討する上では、それらにつ

いても、今後調査を継続していく必要がある。

5 甲本の書写態度

甲本の最末尾文の特異な書写状況が、前稿および本稿で確認したように、その底本にあったであろう状況を忠実に踏襲しているとみなせること、および、甲本全体での使用字母をみても、中古中期から中世において、必ずしも頻用されてはいない字母（「新」「半」「遅」「累」等）を孤例（1回）ながら使用するという特性を持っていることは考慮しておく必要がある。

例えば、この甲本は全体的な書写姿勢として、ひとつには、その底本を忠実に書写しようという姿勢が比較的強かったのである。こと、いまひとつには、仮名字母の使用上の知識や意識も（「志」の限定的使用ほか）、一定の水準以上のものを持っていた人物による書写本なのではないかということ、などが考えられる。

例えば、甲本では、「し」の字母「志」4例の使用箇所は、先に少し触れたように、4例共すべて自立語語頭（動詞、名詞の語幹語頭Ⅱ第一音節）のみに規則的に使用され、その文字使用は意識的であつたとみなせる。念のため「し」の字母毎の例数と「志」の使用箇所を次に示しておく。

○仮名「し」の甲本での使用頻度 合計244例中

「之」²³⁹例、「志」4例、「新」1例

（平林（2001）「三本使用の仮名字母別数量一覧表」より）

仮名「し」	諸本字母	之	志	新
書陵部本	194	51	0	
甲本	²³⁹	4	1	
乙本	²³⁹	4	1	

○字母「志」の甲本での使用位置

二ウ7 「ふちせも志らず」——「知らず」のシ
 三オ5 「志はすの月夜」——「師走」のシ
 一一オ5 「志らであやし」——「知らで」のシ
 二〇オ1 「ならんやうも志ず」——「知（ら）ず」のシ

甲本の書写者の字母使用が意識的であることがうかがえる。底本の状態の保持姿勢などこのような筆録姿勢から推して、甲本は書写態度が自覚的であり、資料として他の写本よりも重視できようか。

これまで、甲本は乙本に比して優位点が多いことが指摘され、一方、書陵部本との比較においてはより原本に近いと見る見方もある。一方、個々に優劣それぞれあり、全体としてはいまだ明瞭な判定はついていない。今後は、本稿で取り上げた字母以外の、他の特徴的仮名字母それぞれの種類や使用状況——本文内での使用場面、写本中での使用位置や配置、語句・語単位内での位置など（安部（2018.5）の章段の位置には傾向がある【注4】——の観点からも、諸写本間での比較を、細かく行ってみる余地があろう。

表 2 「篁物語」 甲本の仮名「し」の 1 行内複数出現箇所 (シシ、シ〇シ、シ〜シ)

連番	丁	裏表	行	「之」の配置	表記 (シのみ字母漢字)	翻字	字母「志」、※ 脚注
①	1	オ	3	之〇〇之	かぎり之つく之て	限り、し尽くして	
②	2	オ	8	之〇之	之ば之	暫し	
③	3	オ	5	之志	すさま之志はすの	すさまじ、師走の	師走
④	3	ウ	9	之〇〇〇之	あ之たにひさ之く	明日、久しく	
⑤	4	オ	7	之〇〇〇〇〇之	之けるかうを之ふる中に	しける。かう教ふる中に	
⑥	7	ウ	2	之〇〇〇〇〇〇之	之ることかた之	知ること難し	
⑦	8	オ	1	之〇〇〇〇〇〇之	給」之かはなむさ之て	給ひしかばなむ、さして	
⑧	8	ウ	1	之〇之	せ之ぬ之の	せし主の	
⑨	9	ウ	9	之〇〜〇之	之は／＼にあとはかな之と	しばしばに、あとはかなし	
⑩	10	オ	8	之〇〇之	け之きあ之う	気色悪しう	
⑪	11	オ	5	志〇〇〇〇之	はかりたるとは志らであや之	謀りたるとは知らで、怪し	知らで (「志」の前にシはないので「志」は変字用というより語頭文字機能優位か。
⑫	11	オ	8	之〇〇之	之りも之らぬ人に	知りも知らぬ人に	
⑬	11	オ	9	之〇〇〇之	かよは之けさう之給	通はし懸想し給う	
⑭	12	オ	8	之〇〇之ゝ	かよは之には之ゝたれど	通はしにはししたれど (本文疑あり)	
⑮	12	ウ	3	之〇〇之	之らず之て	知らずして	
⑯	14	オ	9	之〇〇之	あか之はて之を	明かし果てしを	
⑰	15	オ	1	之〇〜〇之	ある之するにみなとらまほ之	主するに、皆取らまほし	
⑱	18	オ	7	之〇〇之	か之こく之て	賢くして	
⑲	18	ウ	1	之〇〜〇之	くち」お之くいきもせずいかゝおは之ます	(口) 惜しく、息もせずいかがおはします	
⑳	19	ウ	3	之〇〇之	心ち之けり之にし	心地しけり。死にし	
㉑	20	オ	2	之〇〜〇之	まほ之きことかぎりな之	まほしきこと限りなし	
㉒	20	オ	7	之〇之	之ば之	暫し	
㉓	21	ウ	3	之〇〇〇〇之	は之めのごと之てなん	初めのごとしてなん	
㉔	22	オ	5	之〇〜〇之	おは之けり大君に之か／＼のこと	おはしけり。大君にしかじかの事	
㉕	22	ウ	5	之〇〇〇〇之	やれこう之たるきて之り	破れ困じたる着て尻	
㉖	23	オ	5	之〇〇之	か之こく之つ	賢くしつ	
㉗	23	オ	7	之〇〇〇之	人きゝやさ之からま之	人聞きやさしからまし	
㉘	24	オ	1	之〇〇〇〇之	あや之とおぼ之	怪しと思し	
㉙	25	オ	1	之〇之〇〇之	之ろ之めさ之	しろしめさじ	
㉚	25	ウ	1	之〇之	うるさ之か之	うるさしかし	
最末尾文	26	ウ	3	之〇□□之〇新	べ之□□又あら之か新□	べし。□□また、あらじかし□	1 行中に 3 か所の例は 25 丁オ参照

※ 注＝「志」は上記のほか、「知らず」(2ウ7)、「志ず」(20オ1)【＝「知らず」平野由紀子(1988)】

6 京都大学文学研究科図書館所蔵本「小野篁集」〔資料篇 II〕

安部 (2020) および本稿での考察を経てみると、今後、仮名(字母・字体)のレベルまで比較考察していくためにも、末尾に空白がある京都大学本の「篁物語」写本だけでなく、京都大学所蔵の写本「小野篁集」の方も、書陵部本の写本として、孫本の位置ではあるものの価値があると思われる。京都大学所蔵本「小野篁集」は、京都大学本「篁物語」と同筆とみられ、書陵部本の忠実な写本であるので、貴重な写本のひとつということにもなる。

そこで、前稿の「篁物語」と一緒に取り寄せてあつた複写版も、京都大学文学研究科図書館所蔵本「小野篁集」として公開する許可を得ることとした。

さて、この京都大学本について、これまで言及しているのは、津本信博 (1977) のみである。津本氏は、次のように報告されている。

〔一〕小野篁集 (図書番号 5290929)

題簽は表紙左上方に内題ともに「小野篁集」とあり、一方には左記の通り朱印がある。

用字から行、空白、補入、脱字すべて書陵部本を忠実に臨模した写本である。奥書に、

宮内省図書寮本を人の影写したるを借りて影写す
とある。」

【中略、京都大学本の「篁物語」についての同様の説明の後に
続けて】

「何れも書写年時は記入されていないが、比較的新しい伝本である。」(津本信博 (1977))

本「小野篁集」の末尾に記載されている奥書は次の通りである。

宮内省図書寮本を人の影写
したるを借りて影写す

図2 京都大学本
「小野篁集」奥書

そこに、「宮内省図書寮本を人の影写／したるを借りて影写す」とあつて、書陵部本を直接書写したものではないことがわかる。その直系のいわゆる「孫本」という関係(位置)は京都大学所蔵の「篁物語」「小野篁集」共に同じである。それゆえ、上記の津本氏の「書陵部本を忠実に臨模した写本である。」という記載は、底本(親本)という意ではなく、その直前を受けて、孫本でありながら「用字から行、空白、補入、脱字すべて書陵部本を忠実に」引き継いでいる」という意味であろう。

なお、この形式は、次に引いておく京都大学本「篁物語」の奥書での形式と同様である。

○【彰考館文庫所蔵の榊型本《引用者注…2行割で》彰考館には美濃板の袋綴本もあり】を人の影写せるを借りて影写す」

ところで、「人の影写したる」とあるもうひとつの写本の方は現

在所在未詳である。その点でも京都大学本「篁物語」の方と同じである。すなわち、写本にはその底本（親本）であるもうひとつの写本、『書陵部本影写本』（仮称）とでも言い得る「小野篁集」（今回掲載した影印本の親本）があつたことになる。

津本氏は、「比較的新しい伝本である。」とするが、近世以降だとしても、どの程度の新しい書写を想定していたか未詳である。京都大学本の方には書写年代や伝来の年代を推定させる記録は探し出せていない。安部（2020）では、次のように記し、「影写」という語の使用からは19世紀初め頃が上限であり、それ以降のものだろうと推定しておいた。

○【補注】京都大学本の書写年代は不明であるが、奥書にある「影写」はそう古い語ではない。調べた範囲では現在『甲子夜話』『懐堂日曆』での例が古く見られるので、それを抛りどころとすれば、およそ19世紀初め以降の影写ということか。

この書写本は、これまで『篁物語新講』以外では、言及されることも、まして公開されることもなかった写本である。仮名の比較レベルや空白などの文字配りレベルまで、諸本の比較が必要であることが明らかとなったので、書陵部本（Ⅱ祖父本）の忠実な臨模本である京都大学本「小野篁集」の方も、影印を提示しておくことは、意味があろうと考えた次第である。【資料篇 Ⅱ】として、本論本文のあとに、その全文を影印（複写）にて提示する。

7 おわりに——「篁物語」の字母研究の課題

本稿では、『篁物語』の影考館甲本を取り上げ、資料として検討した。甲本の最末尾の1文については、その1文にしか現れない変体仮名（「新」）がある点、および、その1文内での改行部分下部でしか見られない不自然な（他の個所には現れていない）1文字程の余白がある点が、その1文以前の本文部分とは「異質」であることを、新たに指摘した。

それらは、最末尾文が、その直前になぜか2文字分の空白を取っていることと同様に、最末尾文の異質性と、後日の別の段階での追補部分であることを示すと解釈された。それらによって、前稿・安部（2020）での解釈、即ち、最末尾文はそれ以前の本文部分よりも後の段階での後補であること、を補強した。

また、甲本が、前稿での考察で、14世紀中期より以前の形態と推定したことを受け、その古態性が遡れる上限を検討するため、変体仮名の字母を取り上げて検討した。甲本ではそれぞれ1度だけの使用頻度である変体仮名「新」「遅」「半」「累」を取り上げ、その仮名史上における使用開始時期を考察してみた。

これまでの変体仮名史の諸研究と照らし合わせてみると、①「新」については、その仮名としての使用例の上限はおおよそ1、000年前後頃であるので、11世紀以降使用されるようになった仮

名と見られること、②「半」「遅」についても同様であり、上限はおよそ11世紀以降使用されるようになった仮名と見られること、「累」についてはそれらよりもやや遡る可能性があること、などを明らかにできた。

このことから、この甲本ないしその遡及する系統の写本の「書写」作業は、それらの字母使用が可能になって以降の時代ということとなり、およそ1,000年前後頃以降のことと推定される。写本甲本の仮名字母表記の上限は、10世紀末期より以前には、現時点では、溯らないと考えられる。

また、甲本が、末尾無空白本よりも古態を留めるとは推定されるものの、仮名字母「新」「遅」「半」「累」が使用可能である点からみて、原『篁物語』が成立したと推定された時期（10世紀終り）までは溯り得ず、よって甲本は、原本の表記そのままである可能性はかなり低く、また、原本と全く同じ状態での写本でもないと解釈されることになろうか（注5）。

今後の課題としては、「新」「遅」「半」と同様に、甲本・乙本に共通して例がある一方、書陵部本「小野篁集」では用例がまったくないという字母には、ほかに「盈（え）」「勢（せ）」「日（ひ）」「見（み）」「羅（ら）」「類（る）」がある（表1）の細梓部参照、【注6】。甲本にしかない「楚（そ）」「裳（も）」もある。それらも、末尾有空白系統本の特徴を考察するためには検討する必要がある。諸本研究としても、甲本と他の写本との比較を継続していく必要

があると思われる。

注

【注1】『篁物語』は、かつて成立時期が未詳でかつ小品ゆえに、日本文学史上も、日本語史上も、あまり注目されてこなかった、と言えよう。しかし、近年の考察から見ていくと、その短さとは対照的に、重要で貴重な位置を占めている作品であることが見えてきた。例えば、文学史上では、『源氏物語』に与えた影響（例えば、夕霧像の造形、浮舟の場面他）、また、平安時代の文芸作品として『源氏物語』以前の段階にあつて、歌物語（伊勢、大和、平仲）を受けつつも、歌物語の要素に作り物語としての創作性の融合」というものを意図した、いわば「作り歌物語」的な創作意図を読み取れること（山口博、陣野、中村祥子、安部。安部（2020）参照）、日本語史上では、その語法が900年代後期の日本語をかなり忠実に投影しているという点（形容詞（安部）・形容動詞（村田菜穂子）の計量語彙論的特性、係り助詞の用法（安部）などが、読み取れる。

【注2】最末尾文での改行位置における行末の余白の取り方については、半沢幹一氏（共立女子大学教授）に、安部（2020）をお送りした際に、その他行との相違についてご示唆いただいたものである。拙文発表時はこの行末余白までは目が向いていなかった。ご教示に感謝申し上げます。

【注3】（仮名字母参考文献）の内、次の文献での図表類の詳細は以下の通りである。

(1) 池田亀鑑 (1911)『古典の批判的処置に関する研究』の図表第一と図表第二は、以下の通り。

○「図表第一 古代平仮名字体一覧表」

一 空海勝道碑、二 法華文句、三 玄奘法師敬啓白

- 四 金剛般若修驗記、五 金光明最勝王經、六 大智度論
 七 蘇悉地羯羅經略疏、八 大蜀有年識語、九 御物周易抄
 一〇 日本靈異記、一一 土佐日記、一二 自家集切
 一三 信義本神樂歌、一四 高野切乙、一五 桂宮本万葉集
 一六 名家歌集切、一七 寸松庵色紙、一八 秋萩帖
 一九 道風消息、二〇 繼色紙、二一 本阿弥切、二二 駕歌切
 二三 御物粘葉本倭漢朗詠集、二四 御堂関白記
 二五 元永本古今和歌集

○「図表第二 土佐日記諸本平仮名字体統計表」(1990 第二刷使用)
 「青谿書屋本を中心として、定家自筆本、圖書寮本、近衛家本、三条西家本、大島氏本、為相本に使用せられてゐる仮名字体を表示したものである。」

(2) 加瀬藤園 (1970) 『古筆かな字典』の付表 3、4、5、6 は次のものである。

- 「付表 2 平安初期訓点かなに現われた女手の字源表」(大坪併治博士 訓点語の研究、春日政治博士 古訓点の研究、中田祝夫博士 古点本の国語学的研究による、とある)
 ○「付表 3 高野切 (一種) 字母頻度表」(字源百二字)
 ○「付表 4 定家書写本土佐日記字母頻度表」(字源百二字)
 ○「付表 5 十世紀における女手の書体表」は「有年申文」「定家臨貫之土佐日記」「貫之自家集切」「道風集古浪華帖」「東南院紙背消息」「石山寺紙背消息」「北山抄紙背消息」「道長御堂関白記」「醍醐寺五重塔落書」
 ○「付表 6 三蹟の草の手と中国古代の草書の対照表」は「道風秋萩帖」「佐理 賀歌切・下絵萬葉集切」「行成 関戸本和漢朗詠集・雲紙帖」

本和漢朗詠集・粘葉本和漢朗詠集・高野切三種蓬萊切」佐理 2 例(賀歌切・下絵萬葉集切)、行成(雲紙本和漢朗詠集) 2 例とある。(中国古代草書は略す)。

(3) 長谷川千秋 (2008) 「使用字母からみた『秋萩帖』のかな」の別表での資料は、まず「別表 1『秋萩帖』と九、十世紀の仮名字料の字母」における 23 資料(24 資料中、別表 1 では⑩を除く)は下記一覧のものであり、使用字母と用例数が示されている。

同じく「別表 2『秋萩帖』と草仮名字料の字母」の資料は「秋萩帖」「綾地切」「自家集切」「高野切」「深窓秘抄」「蓬萊切」「粘葉本和漢朗詠集」「卷子本古今集」での各仮名字母の用例数表である。

○「別表 1」の 23 資料

- ① 多賀城跡出土仮名漆紙文書、九世紀中頃、書状か
- ② 平安京右京三条一坊六町跡出土墨書土器、木簡、檜扇 九世紀後半(八五〇～八七〇年代前後)、墨書土器(墨 14、15)、檜扇(難波津歌、木簡(木簡 6))
- ③ 讃岐国司解端書藤原有年申文、八六七年、上申書
- ④ 東寺檜扇墨書、八七七年、落書か
- ⑤ 周易抄、八九七年、訓
- ⑥ 富山県赤田一遺跡出土草仮名墨書土器、九世紀後半以降、墨書土器(習書)
- ⑦ 富山県東木津遺跡出土難波津歌木簡、九世紀後半か、木簡(難波津歌)
- ⑧ 左京四条一坊二町跡出土難波津歌木簡、九世紀後半か、木簡(難波津歌)
- ⑨ 円珍病中言上書、九世紀末、書状
- ⑩ 三重県斎宮跡出土仮名墨書土器、九から十世紀、習書か

- ⑪伊州某書状写、九〇四年（一八〇九年の写）、書状
- ⑫齋然生誕書付、九三八年、書付
- ⑬新潟県門新遺跡出土漆紙文書第三号、十世紀第二四半期、書状
- ⑭茨城県小作遺跡出土仮名墨書土器、十世紀前半、墨書土器
- ⑮因幡国司解案紙背仮名消息、十世紀前半、書状
- ⑯土佐日記（藤原定家臨模部分）、九三五年頃、日記
- ⑰平安宮左兵衛府跡出土和歌墨書土器、十世紀前半から半ば、墨書土器（和歌）
- ⑱醍醐寺五重塔天井板落書、九五一年、天井板（和歌）
- ⑲山梨県ケカチ遺跡出土和歌刻書土器、十世紀半ば、刻書土器（和歌）
- ⑳虚空蔵菩薩念誦次第紙背仮名消息、十世紀半ば、書状
- ㉑金剛界入曼荼羅受三昧耶戒行儀表紙背消息、十世紀半ば、書状
- ㉒小野道風書状、九六〇から九六六年頃（一八一九年模刻）、書状
- ㉓鹿児島県気色の杜遺跡出土仮名墨書土器、九世紀から十世紀末、墨書土器（和歌）
- ㉔北山抄紙背仮名消息、九九六年より少し前、書状
- 【注4】 これら「羅」を含めて5字母の出現箇所は、安部（2018:5）の章段分類で言えば、「原『篁物語』（構想の第一段階と推定された諸段）にあたる「漢字の才」（漢才）に関わる段ではなく、それ以外の段（最末尾文「新」、兵衛佐の段「遅、累、羅2例」、第2部で妹亡霊との件を妻が問い質す段「半」）に偏る。この傾向を解釈するには、他の特徴的字母をさらに調査する必要がある。
- 【注5】 今回の考察の結果や安部（2021）での諸段構成の特徴、その他の拙論から、現段階での総合的な解釈を推定も含めて記すと以下のようなことが考えられると思われる。これらについてはさらに考察を加えていく必要があるが、『篁物語』に関する連作の小考も既に10本程と長くなっ

たので、ひと段落置くためにひとまず中間段階としての所感をここに書き留めさせていただく。

○甲本は、原本からはさほど多くの書写過程を経ているのではない（1、2回か）と思われること（『篁物語新講』でも解釈されているように、原本の仮名からの誤写過程が比較的推定されやすい箇所が数か所あること等）、○本稿で考察した変体仮名が、兵衛佐の場面と最末尾文に集中する点は、あるいは「原『篁物語』」部分（第一構想部分）と追加構想部分との間に時期的な間隔がわずかにあり、それらの変体仮名を使用可能とする何らかの変化（意識ないし日時的）が筆記者に生じた可能性が疑えること、○一方、そのような時期的推移はあり得るものの「稲荷詣」の男女描写の特徴は『枕草子』『源氏物語』（での稲荷詣描写）の時代以前と推定されること、○『篁物語』は長編作品（例えば『宇津保物語』）を構想するためのいわば習作として構想された可能性を疑わせるような構成上の近似性を『宇津保物語』とに（さらに『源氏物語』とも）見せていること（安部（2021）等参照）、○篁に対する呼称のユレや表現の余剰な重複（四十九日迄の法要ほか）などからは推敲を経た完成品というよりは、統一的整理を待たずに終った途中段階的な作品という可能性が疑えること。

【注6】 今回「累」を取り上げたが（甲本1、乙本2、書陵部本は7例、取り上げた箇所は甲本・乙本共通箇所）、他の3字母とやや傾向が異なっていた。「新」「遅」「半」と使用度数の点で共通する字母に、書陵部本では0例だが甲本・乙本でどちらにも例がある「類」があった。だが、「類」（甲本2、乙本1例）の出現箇所は一致しないので、甲乙で使用箇所が一致する字母の方が、底本とも一致している可能性が高いと考えた。「羅」も調べるべきであったが、今回の課題とする。

【訂正・前稿・安部 (2020) の誤記】

安部 (2020) で、京都大学本「篁物語」(国文：『Nm2b』)の旧所蔵番号に間違いがあったので訂正する。

正 旧所蔵番号「529030」 ↑ 誤「529029」

【付記1】本稿掲載の京都大学文学部研究科図書館所蔵本「小野篁集」については、京都大学文学研究科「京都大学文学研究科長・宇佐美文理」氏・名により、令和2年9月16日付け文書「No.京大文図掲8号」の「特別利用許可書」により「全巻」掲載の許可を戴くことができた。明記しつここに研究成果をご報告し、深謝申し上げます。

○許可資料名：小野篁集(国文：『Nm2a』全巻)

(津本信博(1977)によれば、旧所蔵番号は「旧・図書番号529029」とある。)

【付記2】仮名資料と仮名の書体については、書家でもある松岡千賀子氏(学習院大学非常勤講師)にご教授いただくところがあった。御礼申し上げます。

【付記3】本稿は次の研究費による研究成果の一部である。日本学術振興会科学研究費2017—2019年度基盤研究C(基金)(課題番号：17K02285、代表：安部清哉)

【参考資料】

○「甲本」末尾の3文

「いといとよくなり出でれば、この三君を、また二つなくもてかしづき奉る。」の後に

(第1文) 今の人、まさに大学のせうを、むこに取る大臣もあらむや。

(第2文) たゞ、心かたち・才おとり【通釈＝才を取り】給なるべし。

(第3文) 又、あらじかし、かやうに思ひて、文作る人は。

【参考文献】

《仮名字母関係参照文献》

○池田亀鑑(1941)『古典の批判的処置に関する研究』(図表第一 古代平仮名字体一覽表「図表第二 土佐日記諸本平仮名字体統計表」(1980)第二刷使用)

○矢田勉(2012)『国語文字・表記史の研究』汲古書院(第二章第三編 本文と「平仮名類用字体変遷表」ほか)

○矢田勉(2018)「平仮名字体表」『日本語学大辞典』東京堂

○長谷川千秋(2018)「使用字母からみた『秋萩帖』のなか」『秋萩帖の総合的研究』勉誠社(「別表1「秋萩帖」と九、十世紀の仮名資料の字母」、「別表2「秋萩帖」と草仮名資料の字母」)

《仮名字典類》

・加瀬藤圃(1970)『古筆かな字典』三省堂(特に付表3、4、5、6) — 本稿略称『古筆』

・筒井茂徳(1981)『日本書道大字典 かな名跡大字典』角川書店 — 本稿略称『名跡』

・井茂圭洞(1991)『二玄社 かな字典』二玄社 — 本稿略称『かな』

・木村東陽(2006)『日本名筆字典』天来書院 — 本稿略称『名筆』

《『篁物語』関係参考文献》

【執筆者未詳】(1933)『校本篁物語(彰考館甲本)』『文学』創刊号(1—1)、「附録」

安部清哉(1996:3)「語彙・語法史から見る資料——『篁物語』の成立時期をめぐって——」『国語学』184

石原昭平・根本敬三・津本信博(1977)『篁物語新講』、昭和52、武蔵野書院

津本信博(1977)『『篁物語』の本文』『篁物語新講』、昭和52、武蔵野書院

津本信博(1977)『『篁物語』の成立をめぐって』『篁物語新講』、昭和52、

武蔵野書院

平林文雄・財団法人水府明徳会編著 (2001) 『増補改訂小野篁集・篁物語の研究 影印・資料・翻刻・校本・対訳・研究・使用文字分析・総索引』、平成13、和泉書院

安部清哉 (2009.3) 『篁物語』 承空本 (小野篁集) に関する研究課題『人文』 7

安部清哉 (2010.1) 『篁物語』の井野葉子氏『源氏物語』浮舟巻での引用』説補強ならびに祖形小考』『古典語研究の焦点——武蔵野書院創立90周年記念論集』、平成22、武蔵野書院

安部清哉 (2014) 『篁物語』佐藤・前田編『日本語大事典』、平成26、朝倉書店 (項目執筆)

安部清哉 (2017.3) 『原『篁物語』の作者・成立年と源順および河原院歌壇沈淪歌人群の長歌・和歌——九六一年から九八〇年頃か——』『学習院大学文学部研究年報』 63

安部清哉 (2018.3) 『伊勢物語』三十九・四十・四十一段と源順——『篁物語』第一部・第二部共通の二典拠章段として——』『人文』 16

安部清哉 (2018.5) 『挿入段落・附載説話という視点から見た『篁物語』の構成と形成——残る断続場面の「ふみ (書≡漢字)」と「う」主題——』『学習院大学教職課程年報』 4

安部清哉 (2018.6) 『係り助詞 (ナム・ゾ・コソ) の四文体別変遷史から見た『篁物語』——源順原作説とも照らしつ——』『国語と国文学』 95-6

安部清哉 (2019.3) 『呼称から見た『篁物語』の段落構成——『せうと (兄)』『男』の相補分布——』『人文』 17

安部清哉 (2019.3) 『贈答歌と会話と段落構成から見た『篁物語』という『つくり歌物語』の創出』『文学部研究年報』 65

安部清哉 (2020) 『京都大学文学研究科図書館所蔵本『篁物語』 (影印) と

その「末尾有空白系統本」の古態性』『人文』 18

安部清哉 (2021) 『指示詞カ系派生語「かく」類語句と冒頭表現から見た平安前期物語『篁物語』』『学習院大学』文学部研究年報』 67

ENGLISH SUMMARY

Title: the Significance and Historical Interpretation of Kana Characters (Kana-jibo: 仮名字母) and Blank Spaces in the Manuscript "Kou-hon (甲本)" from "Tale of Takamura (『篁物語』)", Publication of the Kyoto University's Trans-Manuscript of "Ono-no-Takamura-Shuu (『小野篁集』)"

We investigated two perspectives on the use of the characters in "Kou-hon (甲本)", one of the manuscripts of "Takamura Monogatari (『篁物語』)". One stems from an analysis of the characteristics of its last sentence. Before the last sentence, a two character-wide space is inserted between it and the end of the previous sentence. No other place in the manuscript contains such unnecessary spaces. In addition, the line feed position of the last sentence is different from others in that it leaves a space of one character at the bottom. No such unnecessary margin is found at other line breaks. Also, in this last sentence, only the Kana character "新" (し) is used for the syllable of "shi". 244 syllables for the "shi" character are found in total, of which 243 are "之" and "志", and one "新" the remaining instance in this Manuscript. Taking these characteristics into account, it is viewed that the last sentence is likely a separately added sentence after the text was first established.

The second perspective concerns the problem of when the Kana characters "新 (shi)", "平 (ha)", "遷 (chi)", and "栗 (ru)" began to be used. In "Kou-hon (甲本)", all four Kana characters are used only once. By investigating the period these characters were first used, it is possible to

estimate the date when this manuscript was copied. From research of various documents, it is clear that the four Kana characters saw their first use after about 1000 AD. Therefore, it is presumed that the manuscripts of “Kou-hon (甲本)” were copied after this time.

In summary, it is clear from “Kou-hon (甲本)” that (1) the last sentence is a postscript from a later date, and (2) the authorship of the text is around 1000 AD at the earliest.

Key Words: “Tale of Takamura” (『簗物語』), The Kyoto University’s Trans-Manuscript, “Onono-Takamura-shuu” (『小野篁集』), Kana character (Kana-jibō: 仮名字母), Last sentence, Blank spaces,

【資料篇】

【資料篇 一】

- I—1 「小野篁集」 京都大学文学研究科図書館所蔵本 奥書
- I—2 「簗物語」 「三本使用の仮名字母別数量一覽表」 (平林文雄ほか (2001) より) 【本文内 表 1 参照】
- I—3 「簗物語」 「甲乙兩本対照仮名字母本文」 (平林文雄ほか (2001) より)
- I—4 「簗物語」の各行末の状態 (安部 (2020) 京都大学本「簗物語」より)

【資料篇 二】

京都大学文学研究科図書館所蔵本『小野篁集』 (影印)

【資料篇 一】

- I—1 「小野篁集」 京都大学文学研究科図書館所蔵本 末尾・奥書

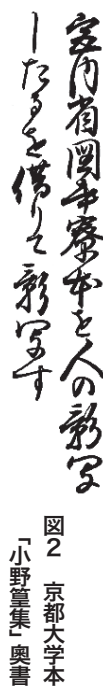


図2 京都大学本
「小野篁集」奥書

- I—3 「簗物語」 「甲乙兩本対照仮名字母本文」 (平林文雄ほか (2001) より、右列甲本、左列乙本)
- 仮名字母資料① 「甲本の字母「新」」

- 甲 止留大之毛安良武也太、
- 1 とる大しもあらむやた、
- 乙 止留大之毛安良无也太、

- 己、路加多知左以於止利給奈留
- 2 こゝろかたちさいおとり給なる
- 己、路可多知左以於止利給奈留

- 部之 又安良之可新●
- 3 へし 又あらしかし
- 部之 又安良之可新

- 加也宇尔於毛比天文川久留人盤
- 4 かやうにおもひて文つくる人は
- 加也宇尔於毛比天文川久留人盤

仮名字母資料②「甲本の字母「遅」

- 2 末多毛安比奈元
またもあひなん
末多毛安比三无

- 3 満太己礼遠礼以乃和良八毛天
またこれをれいのわらはもて
満多己礼遠連以乃和良八毛天

- 4 幾多利世宇止見遅[●]尔左之阿比
きたりせうとみちにさしあひ
幾多利世宇止見遅尔左之阿比

仮名字母資料③「甲本の字母「半」

- 8 世女和以天毛己曾八武可之人半[●]
せめわいてもこそはむかし人は
世女和以天毛己曾八武可之人半

- 9 己、路毛加多知毛佐毛乃之給个礼
こゝろもかたちもさものし給けれ
心・毛加多知毛佐毛乃之給个礼

仮名字母資料④「甲本の字母「累」

之可八奈武左之天天末川

- 1 しかはなむさしてたてまつ
之可八奈武左之帝多天万川

- 2 累[●]加乃石神能御毛止仁天氣不
るかの石神の御もにてけふ
累加乃石神乃御毛止尔天氣不

○1-4 「篁物語」の各行末の状態（安部（2020）より）

安部（2020）より、甲本の改行形式の代用として、模写本である京都大学本「篁物語」の冒頭、途中部分、最終部分を、数丁提示しておく。各行末は、和歌部分以外は1文字分も空きがなく、すべて仮名の書体や配置を調整してきれいにそろえて改行していることがわかる。

529030
2020. 2. 22



ねやのいとうかーはきこまの
ひまめあまを女れまろそんのか
きわーつーていほいあみ満
さんそけきまいむつーらん
人をさんそけいけのこれ大
學ろーうそあわまわとろ
かわなれうーそあひみすか
とあまをれーうぬいわた
すつれーうん張ろそまは

をほふこのみち井井し
君なれいあといはきこま
なうーうすや
ててこれち(き)人まろ
てほろくーうまろろろれ
いまいほーなり前大物
の子なままわあといはきこま
れなみろこま井井し
ーはふあといはきこま

いよとまわあ
まうもあひるん
ほたこれれいのわーいそ
きろわきろえきまろーいひ
ていよこれまといてまろ
なわかまろいれいのうろ
きまろまわいれいのうろ
きまろまわいれいのうろ
きまろまわいれいのうろ

ぬり終てわゝいふとてうへ
 一終をばてこのていふと
 のあやふきさうおそれい
 うあうおそれい終をわいふと
 見一人はうれあぬれ
 ほとふそのまふれと
 ねいひその終
 といふれいこのまふい
 てうなう終りたるひと
 こ終に大にぬあやとねい
 たまふ七のまふあふい
 ともいふ終りけいこのた
 まふすかをたふす人ま
 こがていひあふいぬい
 あつていひとてくあふ
 こわつてあふとてすた
 さめわいてこふむ人
 こ終をかゝるはの終れ

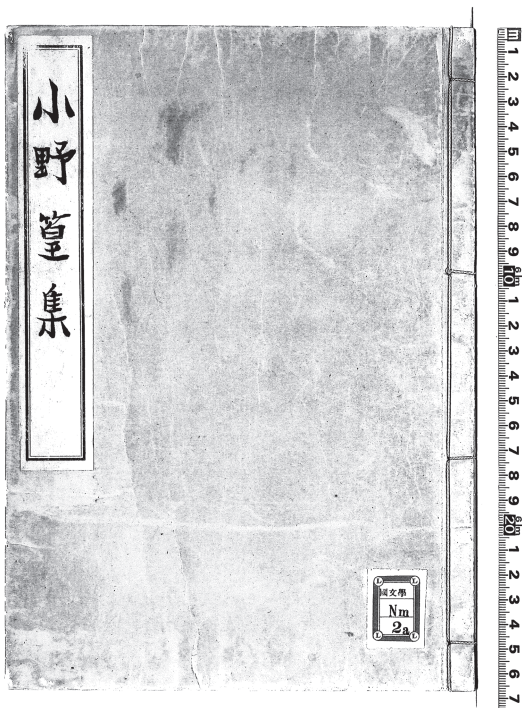
すふらとていひ
 このわいふあふい
 いと終人こあふとては
 ぬらふとていひわ
 いと宰相よりかみ
 たりとこれうん
 むつとていひかく
 まふとす山とてい
 けかほこの國人より
 うあふとてこのあふ
 こていひとていひ
 せりきとていひ
 終りていひとてい
 のあふこれとてい
 いとていひとてい
 三とていひとてい
 かていひとてい
 まはる大のあふ

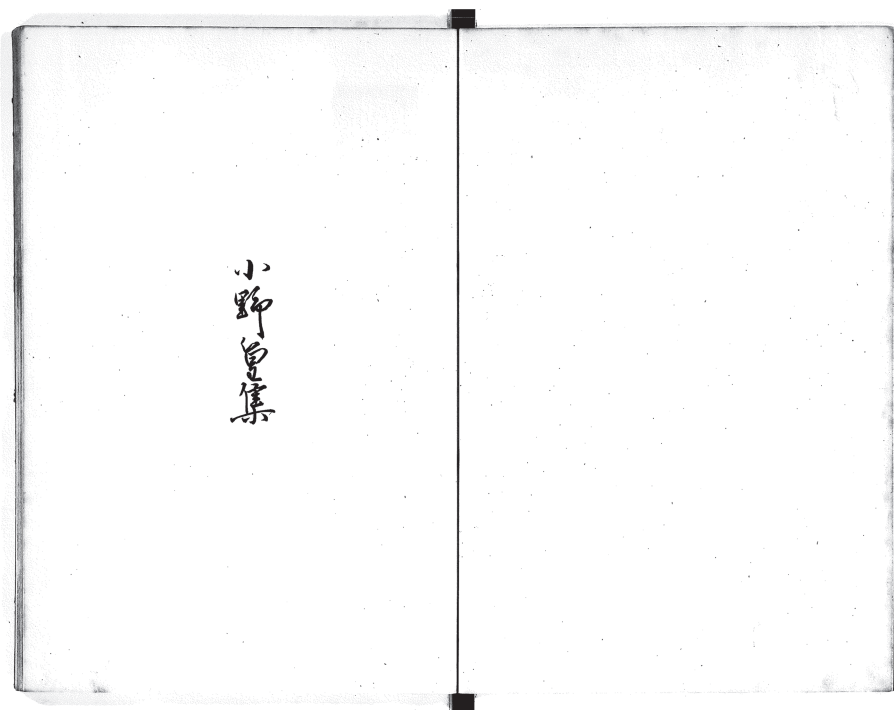
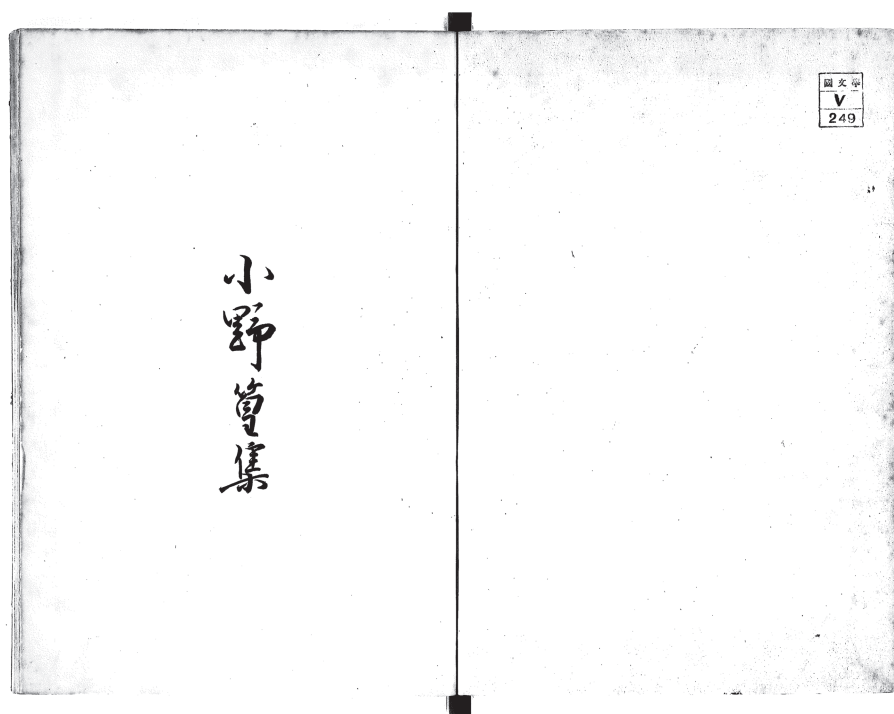
【資料篇 Ⅱ】

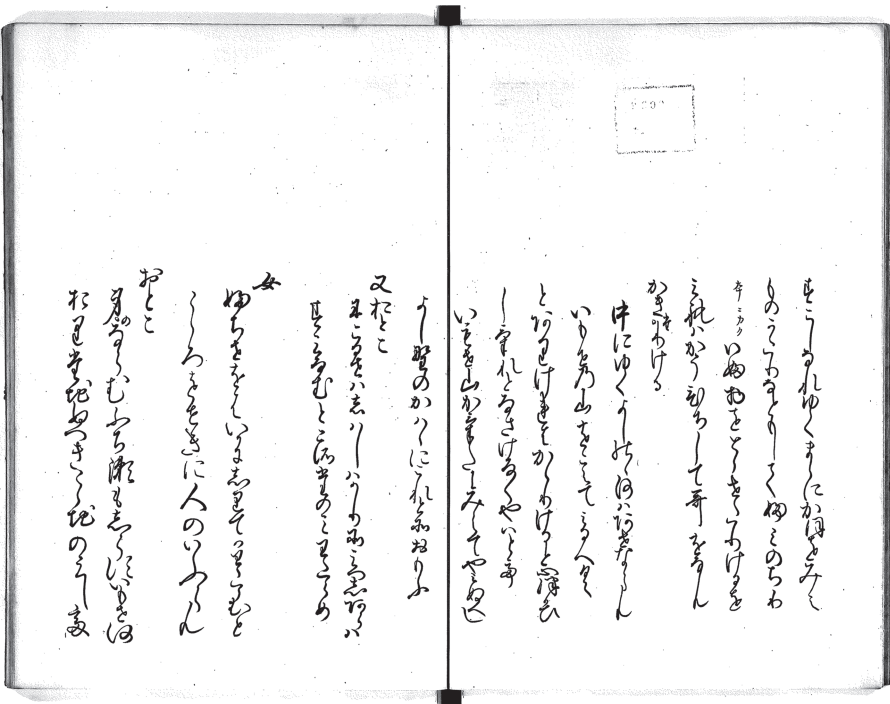
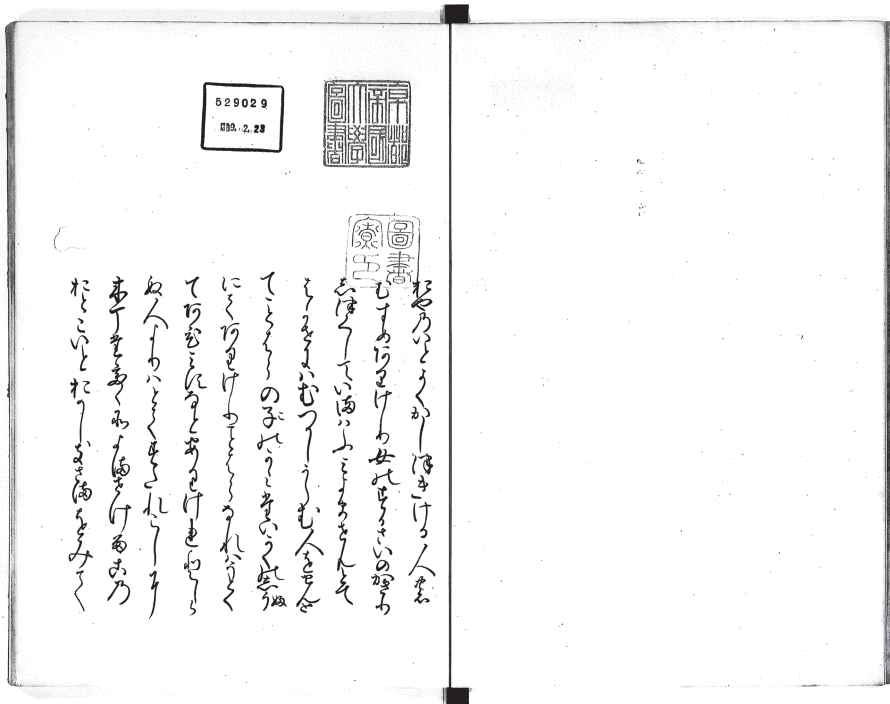
京都大学文学研究科図書館所蔵本

『小野篁集』(影印) 全文

※登録名「小野篁集(国文: Nm2a)」(旧所蔵番号は「529029」)







かゝる福に入らうぬあれハ
いとよとくなをけわぬ事此
をらうわ月にあつては物なり
一けるを人そきれうあるは
こりゝゑぶすの月教ともあつた
なんといひを執ハ

春を待つそのまゝ思ひをわすれ
かの月をおあはれするわけ
を

ちあの人やあられたれもん
 かしこ物置は炭物置うけた
 人うてとむわうと今け
 ねとてううとみとて
 うあ物置にあもけとて
 きにききと物置の物せうけ
 まうとねああうわう
 ねとねといくうとやれた
 きてまの乃物にかあつめ
 一けあまになむこれ女

心に入ておつ事とをのきなむまげつ
かりねしゆう仲はかりをわて
かやうのものをいひつとほ
あつらむおのころおもたねへ
まゝ

君をのこしぬらん
ちきりいふもゆふらん
かた

もせといふきのむすん
おすれろ人乃あを

[illegible]

おしんうさねか〜ばうせいのね
 ち〜このほめかき〜く〜れうあ
 あれりゆきかた〜とあ〜もき〜ひる
 うみ〜う〜〜あき〜き〜に〜と〜
 う〜ちゆ〜か〜〜は〜い〜き〜けな
 じれ〜もあ〜あ〜う〜人〜い〜は〜ち
 てき〜う〜ひ〜ん〜け〜け〜の〜あ〜い〜
 三〜人〜と〜い〜この〜せ〜う〜と〜き〜けり
 けりゆ〜う〜い〜ち〜れ〜れ〜れ〜も〜き〜
 を〜れ〜も〜けり〜ゆ〜す〜て〜ま〜ゆ〜に〜

〜に〜け〜せ〜う〜とい〜が〜か〜せ
 あ〜あ〜に〜〜わ〜ゆ〜〜〜〜〜け
 ま〜は〜い〜く〜ひ〜く〜い〜て〜た〜は〜に
 る〜け〜り〜〜ゆ〜あ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜の
 人〜か〜ち〜も〜けり〜〜〜〜〜せ〜あ
 か〜り〜けり〜ゆ〜〜〜あ〜い〜あ〜に
 女〜り〜地〜〜サ〜た〜あ〜な〜〜〜
 か〜て〜や〜い〜〜〜〜〜〜〜ゆ〜
 ち〜ち〜ち〜ち〜ち〜ち〜ち〜ち〜ち〜
 て〜の〜せ〜き〜〜ゆ〜の〜〜〜〜〜ゆ〜

か〜ち〜ゆ〜の〜ゆ〜の〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
 け〜ち〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
 に〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
 ま〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
 わ〜ん〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
 と〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
 人〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
 お〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
 か〜ゆ〜

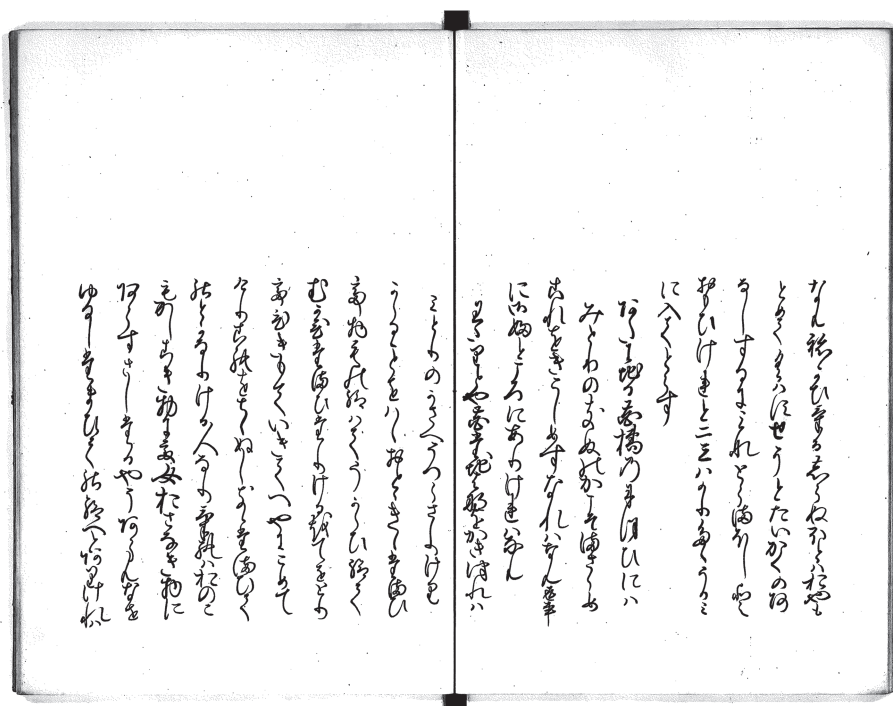
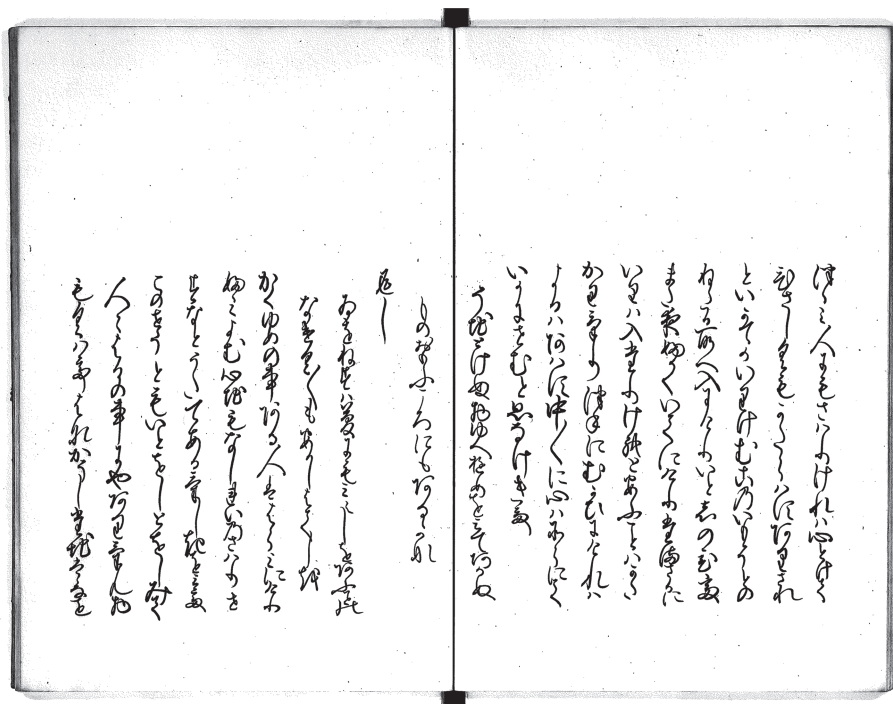
ち〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
 又〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
 一〜車〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
 其〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
 わ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
 々〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
 ち〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
 ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
 ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
 せ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ

[illegible]

おとらうをなくやれまにうゑる身
に御怒つてにまぐあふわう
このさうむしきいかうはてはなわ
ひすほしそふをいふききあ
はうゆきまをもちあひくぬし
えおえげろろくしん人のた
すしとあつちをみかといふ

武井のふ地かなうり　あふ
 あといつてもくねとあすや
 こそこれきうき　あうふと
 ゆうきうもいふたうふに
 いふ　とおもふ　附の大納言のま
 かりけい　ちや　いふ　とまれ
 くらに　これ　きふ　ふ　う　か
 あふ　と　あ　と　う　け　といふ　も
 たれ　た　う　と　も　あ　ひ　う　ん
 まい　は　れ　を　ま　い　は　う　と　き　う　の

さういふ地へ一ちむくはれ
すわといひあやめくたのかん
とて、おののち、こゝろをばら
なかにけし、あ—ういん
人—あ—あ—あ—あ—あ
あ—あ—のけし思ふ—
おあが、こゝろねあやめ
ゆきとのくちまつゆきに
おののやまをういてはい
ゆきまをうつわ路人に来入



[illegible]

とうとうとわく、世々入龍人も
 かくまひけまいたもかくもあは
 いといふくおぬいてかゝる
 まう我は長河を渡る舟に
 かまれらうと海や世々に
 いづもふたふたのうきうき
 如夢

(Handwritten notes in cursive script)

けきほはうなになつてゐるのか
 夕いづへかやうな物を送られて
 いふとふかにちやうどおなじやう
 な物と云ふてゐたが、うめは
 むつと云うは、ゆゑにうめを
 つゝきききききききききききき
 志願のりこにうのうと云ふた
 國のききききききききききき
 りとく國のりこにうのうと云ふた
 誰かめしきり小宗のちやうど

けぬきも毎にわとめ

とつて人を殺さなくかゝあんといひはき
かゝうううてあつてりてこれハ
二回もあつてくつ物ねのわけ
いといふ地わういふとせたい
ねういふをといふを辨ハ

陽をくく身はくまにやわやめ
ゆめのきくくくあまにやわやめ
正一

玉志井ハ身ともかすめはゆかき

[illegible][illegible]

本を毎 かなひきさけりやを
 かき 一わけ 袂と一あつて
 かみん 袖とさくわけりきえん
 くむとをなむりしけあけの衣は
 な女を袖と一袖とをかり 袂は
 せんとあつて袖のりきん袖と
 く車いかにきき袖ふとち
 ぼいぬと袖とくきく袖の袂は
 いとくくみあひひうけき袖は
 ねねちき家に袖とてあはれに

えんととれ路をいかに入しけり
 しかつら路く南女主人たりけり
 大君に志くくのしけりつら
 とときとれ路へいへるあな
 入路ぬゆの君たりききとれ
 青いふとれ君になとれ路も
 かき色ね路きともふふとれ
 とれ路にいとふふとれとれ
 つらとれとれとれとれとれ
 御まうわとれとれとれとれ

はつとろきねの和紙にうゝきり
もくし、墨あらしくはてさてお柳
めつ御とのびりとわさくもなや
まきうらぐ地よりとある所のこ
ふた面をいそぎよく洗ひ見た所
ねんきつむしゆまいけぬおど
かいのもむきとせしむに似た
海へと海も流るはれり。紙をか
ゆくとあらうたゞとぬみいや
かめしうばにあはれきふ

いふは、いふ人おやうか
 國心にていたるものと
 いふ上田の親いと云ひしり
 一歩あつてさきとせむがな
 あく一歩あるべきあそこのは
 いふものがあるやと井もさす
 あまゝいふところかと思ふ
 わたしをついていふや
 みんづれこれねたの
 おもひよきとておもふ

といふをわかれの居るを、かゝる
 さまをのける智といふにねい
 大なるやと心得けりとする評
 するもさういふこと、うみたまは
 といふものの語にほめるがやう
 人々をいふとくしてはいふれは
 めいとあるへうも事とあら
 おれの事や我うあれもさうい
 おおさまわいさうもいふむ
 人へもさかちりさうもいふ

ち掛ひあゝ——とてくゑきき
 かゝくまゝいふはあなうへん
 何あんはひい——とてきた
 何つゝあらせといふかん
 何にせよあう人のあな
 いあなをいふかん
 あなう——とてあなうかん
 うあなうかんめすかゝてい
 てあなうかんめすかゝてい
 のうかんめすかゝてい

なちきふぬとく

早つ折れ、そのまゝに
 だゝゝゝね、ちゝゝゝ
 いゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 あゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 かゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 ちゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 うゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 いゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 にゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かなしきものいかにくはるゝまゝ
 心いそぐはくゝととえゝあ
 よこのふれ人よいぬしはあ
 ありふゝのけいふくゝとと
 ぬいなるものなだるゝわ
 ーあは二あはと目あゝ人乃
 矢くゝとのゆゝゝとととと
 びくゝととととととととと
 ぞととととととととととと
 ぞととととととととととと
 ぞととととととととととと

